日本観光研究学会第25回全国大会論文集（2010年12月）pp. 161－164
Proceedings of JITR Annual Conference, 2010. All rights reserved.
Printed in Japan. Copyright 2010 Japan Institute of Tourism.

観光案内図の掲載地点からみた鞆の浦の観光空間

Detecting the Tourism Space by Appearance Frequencies of Tourism Haunts in the Guide Maps of Tomonoura

鈴木　晃志郎*
SUZUKI Koshiro

本研究は、港湾架橋事業の可否をめぐって揺れる福山市鞆町（鞆の浦）において、観光案内図に掲載された観光名所の掲載頻度の分布パターンを GIS で解析するものである。鞆の浦の観光空間の拡がりを掲載地点の密度分布パターンから把握し、製図者によって「訪れるべき名所」と価値づけられた掲載地点の分布傾向に含まれるジオポリティクスを定量的に読み解く。分析は観光案内図 11 枚を対象とし、内容分析から計 223 地点の観光名所が抽出された。そこで、各掲載地点が 11 枚中何枚に引用されたかを掲載頻度として集計し、各々の位置情報をもとに GIS 上へ取り込み、頻度を階級区分して表示させた。その結果、観光案内書の種類に関わりなく、全鞆町のうちおよそ 3 分の 1 にすぎない江の浦地区周辺の徒歩圏内にある名所がほぼ全てを占め、それ以外の（平、原の）2 地区は観光名所がほとんど出現しなかった。鞆の浦の架橋問題は、景観権か生活権かを対立軸としているとされてきたが、実際は「観光圏」に含まれている受益者と、捨象された者との対立軸も存在しているのである。

キーワード：観光名所（tourism haunts），観光案内図（guide maps），観光空間（tourism space），批判地図学（critical cartography），地理情報システム（GIS）

１．はじめに

本論文は、複数の観光案内図に含まれる観光名所の掲載頻度を手がかりに、批判地図学的な見地から、鞆の浦の観光圏の可視化を試みることを目的とする。観光案内図に掲載された地点の掲載頻度と空間分布から、観光名所の空間的な拡がりを捉え、公共事業をめぐる景観訴訟に揺れるある港町のジオポリティクスを、読み解こうとする試みである。

２．批判地図学と観光空間解析

(1) 批判地図学とは何か

地図学に空間と権力の視座を導入し、ポストモダン的な見地から分析した先駆者は、イギリス出身の地理学者 J.B. Harley と D. Woodward である。1987 年に著した大著『地図学の歴史』において彼らは、地図を「人間世界の事象や概念、状況や過程ないし出来事の空間的な理解をうながす図的表象」（Harley and Woodward 1987, p. xvi）とし、製図者やそのパトロンたちによる権力行使のための道具とみなして、その象徴的役割を脱構築しようとした。彼らの先駆的研究は、これ以降、「批判地図学」と総称される一連の研究へと結びついていく（Crampton and Krygier 2006）。それらは大きく、地図中の地物の表現に注目するものと、図の範域に注目するものに分けられる。本研究のアプローチは前者に属する。

Harley らが主として古地図を研究対象としたこともあって、批判地図学の研究成果は、古地図分析の領域に多く蓄積されている。例えば Manners（1997）は、15 世紀頃のコンスタンチノープルを描いた古地図集成（Liber Insularum Archipelagi）に採録されている地図を多数比較分析し、制作のパトロンだった教会の勢力誇示のため、象徴的な建造物の誇張などの意図的な改変がなされていることを指摘した。同様に、エルサレムを描いた中世の 3 種の巡礼地図を比較した Rubin（2005）は、制作者側の宗派の違いによって、重視されたり省略される聖地が異なることや、異教徒の施設がほとんど描かれていないことを明らかにしている。

近年、批判地図学の分析対象は古地図以外へも広がりつつある。夜の歓楽街をとりあげた案内資料において、スラム地区を挿し絵で巧妙に隠蔽した例や、異常に多い女性写真の掲載頻度を通して、タイのセックス・ツーリズムを論じる Del Casino Jr. and Hanna（2002）はその好例である。日本でも、明治期から戦間期にかけて作られた旧版地形図の、参謀本部陸地測量部による戦時改描に注目し、柏崎近郊の油田が改描によって抹消される過程を検討した品田（2010）のように、批判地図学的な見地からの分析例がある。

*富山大学人文学部

これら批判地図学のほとんどは、地図を通じて、製図者の政治的意図や社会的背景を読み解く試みとしては興味深い。しかし、定性的な手法に多くを負っているため、ともすれば説明に客観性を欠く難点もある。

(2) 民製地図の空間解析

批判地図学的アプローチをとりながら、民製地図を科学的に分析することはできないものだろうか。これを可能にするツールとして本論文は、急速に普及しつつある地理情報システム（GIS）に着目する。

図中の地物に代表される点情報は、GIS 上で対照させることが比較的容易である。筆者自身も東京を描写した旅行案内書をとりあげ、日米の案内書が掲載した観光名所の分布パターンを比較解析することにより、日米双方の示す東京のツーリズム空間の差異を明らかにした（鈴木・若林 2008）。

古地図に代表される歴史地図は、科学的な投影法には必ずしも則っていないため、GIS に代表される定量的な空間解析には馴染まない。しかし、近代以降の地図学の進歩により、観光案内図に代表される現代の小縮尺民製地図の多くは、地図学的歪みが極めて少なくなっている。これらの地図なら、GIS を援用すれば、客観的なデータに基づいた批判地図学的な空間解析が可能になるのではないかと考えられる。

正確な投影法で描かれているとは限らない民製地図の図葉全体を GIS 上で解析可能な状態にするには、厳密な誤差補正が必要になる。こうした歪み分析への GIS 応用の試みには幾つか先行研究がある（e.g. 塚本・磯田 2007）。結果の厳密さを求めるのなら、塚本・磯田のように細かくコントロールポイントを設定して歪みを補正することが望ましい。彼らの研究では、1,000 以上のポイントを設定し、図葉の細かい歪みを補正している。しかしこの方法では、図葉一枚のデータを整備するのに膨大な手間と時間を要する難点がある。そこで本論文では、鈴木・若林（2008）同様、掲載地点の分布パターンと掲載頻度を分析する方法を選択した。この方法の場合、各図の歪みの傾向分析はできない反面、ユークリッド的な空間を前提としないため、分析が平易に行えるメリットがある。

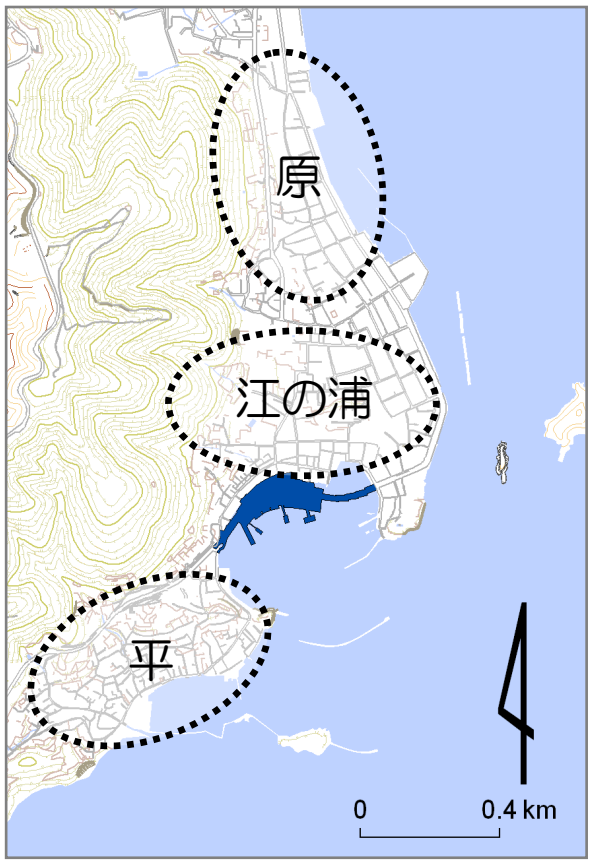
(3) 対象地鞆の浦のポリティクス

本論文が対象地域とする鞆の浦（広島県福山市鞆町）は、福山市の南、沼隈半島の東南端に位置する小さな港町である。一昨年の「崖の上のポニョ」ブームや、一連の景観訴訟を通じ、景観美をめぐるイデオロギー対立の舞台として近年、一躍全国区の知名度を獲得した（鈴木ほか 2008）。

急峻な山々が背後に迫り、前には瀬戸内の海。二者に挟まれた僅かな平地に人口 4,000 人ほどが暮らす。決して恵まれているとはいえない土地条件ながら、江戸時代には福山藩の藩港となり、朝鮮通信使や北前船などの寄港地として繁栄を謳歌した。しかし維新後は藩港の地位を失い、動力船の出現やモータリゼーションの影響で、急速な人口減少と高齢化の中にある。

そうした「鞆離れ」の主な原因とされたのが、歴史ある街ゆえの慢性的な生活環境の悪さである。クランクを多用した城下町特有の街割や狭小な道路幅員のため、鞆町では、ほぼ全域で通過車両による渋滞や救急・消防サービスの遅延などが慢性化していた。そこで 1983 年、自治体は港を横切る架橋道路の建設計画を発表した。両岸までで寸断された 2 つの幹線道路を、港を横断する 680m の道路橋で結ぶ計画である。これにより、渋滞の解消のみならず、フェリー乗り場や小型船用の係留設備、港湾管理施設のほか、観光客向けの駐車スペースを創出する狙いがあった。

しかし一方、歴史ある街ゆえに、鞆町には歴史的建築物が多数残り、景観は観光資源になっていた。港湾部に出現する異物は景観の死を招きかねない。かくて架橋事業を契機に、街並みの歴史的価値を最大限尊重し、不自由を承知で景観を現状のまま保全するか、或いは住民の生活の利便性を保つべく海上に架橋し街を改変するかの二律背反性の中で、鞆の浦は大きく揺れ動きながら今日に至っている（鈴木ほか 2008）。



図−１　鞆の浦の地図と、各地区の位置関係（ベタ部分は架橋予定地）

３．研究目的と分析手法

(1) 研究目的

鞆町は、問題の渦中にある港湾部を有した「江の浦」を挟んで、南側に「平（ひら)」、北側に「原」の、おおまかに 3 つの地区からなる（図-１)。架橋事業の予定地周辺は、太田家住宅や常夜灯など、鞆の代表的な観光資源を有する鞆町屈指の街並み保全地区である。

平地区の住民は、狭隘な鞆町中心部の道路を抜けずには福山へ出られないことから、道路狭隘の影響を最も受ける受苦者であり、反対運動を率いる松居も指摘するとおり、架橋事業への期待もとりわけ大きい（松居 2008)。しかしこれまでの実態調査の結果、筆者はむしろ外部者に対する態度や価値観の違いに、架橋推進派と架橋反対派を隔てる大きな要因があると考えた。

反対派がこれまで掲げてきたスローガンをみていくと、それらは「世界遺産」、「5 点セット」、「ポニョ」、「景観」など、観光客や学識経験者を含む外部者のまなざしを通じて、鞆の景観価値を規定するスローガンが並んでいる。これに対し、架橋推進派を代表する地域組織の「明日の鞆を考える会」が掲げるスローガンは「生活権優先」であった（鈴木 2010)。つまり、架橋推進派は、生活環境改善に未来を託しているのに対し、反対派は「観光地」としての鞆に未来を託している。

観光客向けに制作され設置･配布される鞆の浦の案内図は、生活環境としての鞆の浦を図から捨象する一方、見るべきアトラクションを外部者にアピールするための道具として機能していると考えられる。従って、そこに掲載されている観光名所の掲載頻度を割り出し、種類や地区ごとに比較検討すれば、鞆の浦の紹介者が、鞆のもつコンテンツの何を外部者にとって価値あるものと考えているか、その地理的分布傾向にどのような特徴があるのかを明らかにできると考えられる。

(2) 分析手法

分析にあたってはまず、鞆の浦で入手可能な観光案内図をできるだけ数多く収集し、その結果、合計で 11 種類の案内図の存在を確認した。次に、ゼンリン社から提供されている電子住宅地図（Zenrin GIS）の鞆周辺部から、分析用のベースマップを作成した。

分析は大きく(1)掲載地点の出現頻度を種目ごとに集計する量的な分析（表－１）と、(2)GIS を用いた掲載地点の分布パターン解析の 2 つに分けて実施した。

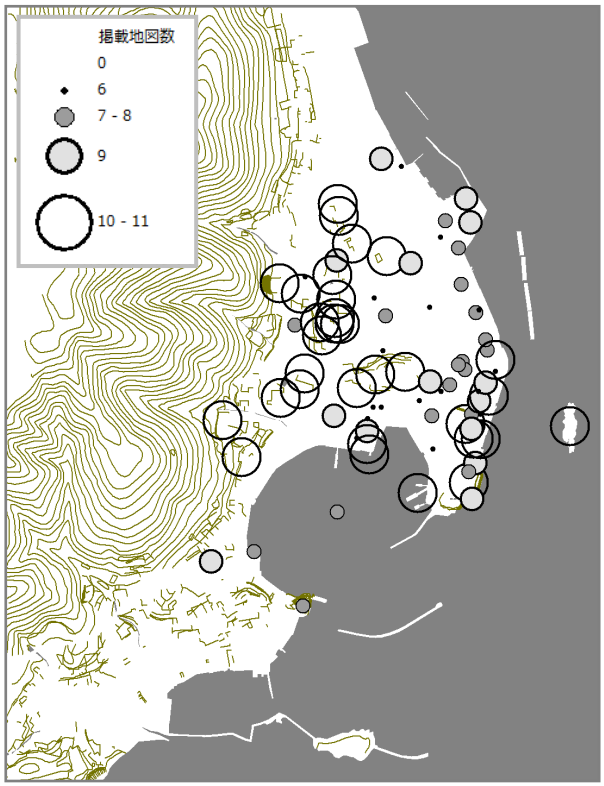
(1)の分析により、本研究の分析対象となったのは、合計 233 地点である。次に、Esri 社の ArcMap 9.x を用いて、Zenrin GIS に含まれる建築物の輪郭を型取ったポリゴン・データから各建物の重心を求め、それをポイント・データとして出力させた。このポイント・データに、(1)で得られた各地点の掲載頻度（1～11 までの 11 段階）をデータ結合した。最後に、この掲載頻度の値を使って、過半数（6 種類以上）の案内図がとりあげたポイント・データを抽出し、これを４階級（10 以上、９、8～7、6）に分類したのち、それぞれを異なる色と大きさで表現させて分析対象とした（図－２)。

４．結果と考察

表－１は、案内図にとりあげられた観光名所が、掲載頻度の面でどのような特徴を持っているのかを、名所の種類ごとに比較したものである。結果、掲載頻度には、名所の種類ごとの明瞭な差異がみられた。最も鮮明なのは、城趾・寺社仏閣と店舗・スーパーとの、掲載頻度における違いである。3

表-１　観光名所の種類別掲載頻度の一覧表

		病院	学校 保育・ 幼稚園	宿泊 施設	寺社	その他 旧跡	バス停 駐車場 インフラ 交通	観光 センター 官公庁	保命 酒屋	その他 店舗 スーパー	金融 機関 郵便局 JA	資料館 博物館	城趾	島	NPO	横軸 合計
掲載地図数	11				1		1					1				3
	10				17	4	3	1					2	1		28
	9			3	2	2	2		1	2	1		1			14
	8		2	1	2	1		1	2		3					12
	7		1			2	1			1		1				6
	6	2				1	3	2	1	8						17
	5	1		1	1	3	3			6						15
	4			1		6	2	1		4		1				15
	3				3	4		1		5	1			1		15
	2		1	1		2	3			19	1	2			1	30
	1			1	1	2	4	3		26						37
縦軸合計		3	4	8	27	27	22	9	4	71	6	5	3	2	1	



図−２　観光名所の掲載頻度別分布傾向
（〇が大きいほうから 10 以上、9、8〜7、6 の４段階区分）

つある城趾はいずれも 9 以上の案内図がとりあげ、寺社仏閣は 27 のうち 22 まで（約 82%）が 8 つ以上の案内図にとりあげられていた。類似の傾向は、いずれも過半数の案内図が紹介している保命酒（特産品の薬用酒）店にもみられる。これらは鞆の顔ともいうべきメジャーな観光名所といえる。頻度 10 以上（図−２で〇印のもの）の、最もメジャーな名所のほとんどが城趾と寺社仏閣、および旧跡であることから、鞆の浦の紹介者はみな、鞆の歴史的景観を、外部者にとって最も価値ある要素と考えていることがうかがえる。対照的に、2 つの例外を除いて大半が 7 以下の値しか得ていない商店やスーパーは、採否の基準を作り手側の目的や価値観により高く依存した、比較的マイナーなアトラクションといえる。

次に GIS を用いて、観光名所の空間分布を掲載頻度別に検討した（図−２）。その結果、過半数の案内図により表象される観光空間が、実質上、ほぼ江の浦地区に凝集していること、また特に頻度の高い名所が、西側の山裾に沿うように、南北に連なっていることが分かった。これらはほぼ全てが寺社仏閣である。

以上を総合すると、(1) 観光客が「見るべき鞆の浦」は、実質上江の浦地区内に限定されており、それ以外の地区は空間的にほぼ黙殺されていること、(2) さらにその江の浦の中でも、山裾にあって高潮に強く土地条件の良い微高地を歴史的に占有してきた寺社や大名などの権力者たちの旧跡が、現在でもなお、より価値ある場所として印づけられ、来訪者の聖地巡礼（pilgrimage）の対象として機能していることが読みとれよう。

５．おわりに

本研究は、鞆の浦を事例に、観光案内図に記載された地点の分布パターンおよび種類別の掲載頻度分析を実施することにより、鞆の浦の観光空間におけるジオポリティクスの解明を試みた。分析の結果それは、江の浦地区とそれ以外、城跡・寺社仏閣とそれ以外の観光名所との間に境界をもつことが明らかになった。ただし、これらの知見は目下、おおまかな傾向分析の裏づけしか得られていない。今後は、頻度別・種目別の分布傾向にどのような違いがあるのかを、カーネル密度推定を活用して、より詳細に解き明かしていく必要がある。

【参考文献】

品田光春 (2010)：地図から消された油田—，地理誌叢，51(2), 19-29.

鈴木晃志郎（2010）：世界遺産登録と観光. 深見 聡・井出 明(編) 海野敦史・鈴木晃志郎・庄子真岐・永吉 守(著)「観光とまちづくり」,古今書院, 73-96.

鈴木晃志郎・鈴木玉緒・鈴木 広 (2008): 景観保全か地域開発か. 観光科学研究, 1, 50-68.

鈴木晃志郎・若林芳樹 (2008)：日本と英語圏の旅行案内書からみた東京の観光名所の空間分析. 地学雑誌, 117(2), 522-533.

塚本章宏・磯田 弦（2007）:「寛永後萬治前洛中絵図」の局所的歪みに関する考察. GIS−理論と応用, 15, 111-121.

松居秀子（2008）：鞆の浦・架橋理立てによる景観問題をめぐる課題および世界遺産訴訟から. 2008 年度第 5 回都市環境デザインセミナー.「福山・鞆の浦」から景観を考える. http://judi2.sub.jp/judi/s0805/to1.pdf (accessed: 2010. 8. 6)

Crampton, J.W. and Krygier, J., 2006. An introduction to critical cartography. *An International E-Journal for Critical Geographies*, 4 (1), 11-33.

Del Casino Jr., V.J. and Hanna, S.P. 2002. Mapping identities, reading maps. In Hanna, S.P. and Del Casino Jr., V.J. eds. *Mapping tourism*. University of Minnesota Press, 161-185.

Harley, J.B. and Woodward, D., eds. 1987. *The History of Cartography*. Chicago: University of Chicago Press.

Manners, I.R. 1997. Constructing the image of a city. *Annals of the Association of American Geographers*, 87(1), 72-102.

Rubin, R. 2005. One city, different views. *Journal of Historical Geography*, 32, 267-290.